

## [エッセイ No.24 空が広いと歩いてしまう]

昨年に続き、ウィーンに行ってきた。

今回は、様々な友人とのおしゃべり会、“かかりつけ婦人科医”の診療、元夫の弾くコンサートなどの日々の合間に、私のダンスの先生ペアの「競技選手としての引退試合」応援観戦、という目的もあった。結果は世界4位で、踊りも(20年近く見続けてきた私の目には)、今までで一番すばらしかった！ スキーリゾート地として(オーストリアでは)有名な田舎での競技会、美しいアルプスの山々に囲まれた空気を、体いっぱい吸い込む。

日本からの友人が『『世界の車窓から』みたい！』と、汽車の窓に張りついて感激していたその風景は、目の前にせまる山肌と小川、牧場で草を食む牛や馬、ヒツジ、鹿。懐かしかった。50年近く前に、初めてドイツに来た時に目にした、その同じ景色が広がっていた。そして、ヨーロッパでの夏の休暇で訪れた山々がそこにあった。ウィーンからほんの何時間か汽車に乗れば目にできるこの自然！ 昔からなんの変わりもなく、「のどか」という言葉しか出てこない。本当に生き返る思いだ。

と言っても、ここに行き着くまでにはちょっとしたドラマが…。

ウィーンにはその昔、西駅と南駅があって、西側、つまりドイツやフランスとの行き来には西駅、そして南方面、つまりイタリア側へは南駅を使うことになっていたが、10年ほど前に大きな「中央駅」ができた。南駅を大掛かりに改築し、現在ではほとんどすべての列車がこの「中央駅」から行き来する。

「中央駅」ができてから全く利用したことがなかったので、Schladming という田舎へ行く列車に乗るために、かなり余裕を持って駅に着いた。すべて確認してサンドイッチとお茶を買い、発車ホームで座って、本を読みながら列車が入ってくるのを待っていた。いくつかの列車が入っては出ていく。

20分以上経っていただろうか。なぜかふと気になって、案内表の表示を再度確認に行くと、なんと発車ホームが変更になっているではないか！

実は、日本の駅と一番違うのは「静けさ」だ。乗降案内のアナウンスもないし、発車のベルも鳴らない。列車が入ると人々が降り、乗る人が終わると出ていく、その少しのざわめきがあるだけだ。だから時計とにらめっこをしながら、自分で何回か確認しないと、乗り損ねることも起こり得る。

日本では何のアナウンスもないなんてありえないだろう。「不親切！」などとのクレームで、大変なことにもなりかねないが、欧米の人たちはきっと、「なんで？ 自分したことだから自分で考えて動けばいいだけでしょ」と言うに違いない。いわゆる本当に「自己責任」だ。というところで、何とかぎりぎりに間に合って乗ることができた！ それに加えて、5分や10分遅れる列車は当たり前、というかしょっちゅう

ある。もちろん何の「謝罪」も「言い訳」も案内もない。乗り換えに間に合うかどうか  
遅延が心配な人は、「自分で」車掌さんに尋ねる。おおらかと言えればおおらかだ。

ふと昨年ウィーンで見た、地下鉄や市電の時刻表のことを思い出した。早朝と終電  
近くの時刻は記されていたが、あとは「およそ3分から6分間隔」、としか書いてな  
かったあの「衝撃的」な時刻表！ もちろん今でもそのままだ。それにテレビ画面を  
見ても時刻が現れることはないし、1, 2分を気にしながら駅の階段を走ることも  
ない。まあ、“おおらか”でいる以外にないな、と思う。

そうそう、“おおらか”と言えればホテルの朝食ビュッフェ。オーストリアの乳製品は本  
当においしくて、コクのあるバター、種類豊富なヨーグルトやチーズにどうしても  
手が伸びてしまう。さまざまな卵料理やパンに混ざって、たくさんの果物や野菜が  
“そのまま”置かれている。トマトやピーマン、リンゴやバナナ、それぞれ丸のまま。  
ぶどうのように簡単に分けられるものもいいが、丸のままのトマトやキュウリ、ピー  
マンはどうするか？ それぞれが好きだけ切り取ってお皿に乗せて持っていく。  
片手で押さえて、片手でナイフを持って切る。私も含め、皆抵抗感などなく、当たり  
前に素手。(パンにはさすがに、押さえるための布ナプキンがある。)”潔癖な”日本  
人だったらきっと、写真を撮って SNS にあげて、非難の言葉とともに炎上させる  
だろうな……。 (でも日本でも昔は、お友達のお母さんたちが素手で握った「おに  
ぎり」、皆何の問題もなく食したのに？！)

そしてもう一つびっくりしたのは、戸外での喫煙におおらかなこと。道を歩いてい  
ると、時折流れてくるたばこの香り。なんか懐かしいような不思議な感じがする。  
カフェの戸外に座っていると、隣の席の男性が煙草に火をつける。誰も何も言わな  
い。日本ではもう見られない風景だ。もちろんほとんどの店では、店内は禁煙。で  
も外で四方八方に流れて消えていく空気までは、“支配”しようと思わないようだ。  
ただその分、道に落ちている吸い殻の多さにはちょっと残念な思いもする。でもそ  
の分、街中にごみ箱や吸い殻入れがたくさんある。これも日本ではもうほとんど目  
にしない。

ひとつ、日本での日々の中ですっかり忘れていた「楽しみ」を思い出した。それは、  
知らない人とのスモールトーク。以前、ウィーンのカフェのウェイターさんの洒脱な  
会話について記したことがあるが、(これもサービスの一つだ！)、今回紹介する  
「会話」は、日本では恐らく考えられないだろう。

外貨換金のために訪れた、とある銀行での窓口。パスポートの提示を求められる。  
短髪でちょっとガタイのいい、担当の中年男性が言った。

「あ、あなたの誕生日は〇月〇日なの？！」

「はい」

にこっと笑顔で「僕もだよ！」  
私が「エルビス・プレスリーもよ！」と返すと、すかさず、  
「ジェニファー・ロペスもね！」お互いに「ハハハ！」と笑い合い手を振って別れた。  
もちろん全く知らない人である。  
そして、あるコンサートのクロークでのこと。私のコートを受け取ったオバサンが、  
「あら、素敵なワンピースね」と一言。  
「昼間だけど、せっかくのコンサートだから、ちょっとオシャレしてみたのよ」と私。  
「いいわね、とっても気に入ったわ！ コンサート、楽しんでいらしてね！」  
ただそれだけだが、なんとなくふんわりとした気分になる。

日本から来る友人夫妻のためにウィーンで予約したホテルのフロントでは、私は一生懸命“オセジ”を振りまいた。  
「初めてウィーンに来る友達に、伝統的でとってもウィーンぽい素敵なホテルを探してここに決めたの。また来てほしいから、公園側に窓があって、静かな大きめのいいお部屋をお願い、お願い！ このホテルに絶対に感激してほしいの。」  
こんな言葉を毎日聞かされたフロントマンは、彼らのチェックインの後、私にちょっと片目をつぶって言った。  
「とてもいい部屋を用意したからね、きっと気に入ってくれると思うよ！」  
部屋を覗いたら、窓から緑がいっぱい見えて、本当に静かで広々としているし、大きな書斎テーブルに天蓋付きの大きなベッド！  
シツコク頼んでみるものだ。だってブッキングしてあったのは、もちろんごく普通のスタンダードツイン部屋だったのだから。  
デジタル社会とは言え、こういうことはやはり PC の画面ではなく、「人間対人間」で直接気持ちが伝わなければ叶わない。まだまだ「古き良きウィーン」の名残りを楽しんだ日々でもあった。

古い建物の続く街並みで、いわゆる高層ビルはない。そのおかげで空が大きくずっと広がって繋がっている。その空につられてどんとどんと歩いてしまう。何も意識するわけではないのに、毎日の歩数は一万歩近くなる。  
そして今回、日本の友人の小さなお嬢さんのために、初めて（ウィーンでは有名な）「観光馬車」にも乗った。小さな路地や大きな広場を抜け、馬車はゴトゴトと走る。ふと過去の時代に思いを馳せ、その昔、モーツァルトやベートーヴェン、シューベルトやリストといった音楽家たちも、こんな風にヨーロッパの街を旅していたのだなぁと感慨にふける。でもお尻の下のゴトゴトは、実はあまり快適ではない。  
そう言えば、パリのパラリンピックの車椅子マラソンの選手たちが、「何がつらかったって、ゴトゴトする長い石畳の道だった」と言っていたことを思い出した。